つながりから生まれる幸せ

富山国際大学付属高等学校　３年　佐々木　光梨

「世界の幸せ」という言葉を聞くと、以前の私はとても大きくて、自分には遠いもののように感じました。しかし、この夏に参加したインドネシア研修を通して、その考えは大きく変わりました。小学校・高校・大学での交流や、環境問題に関する学び、そして海外協力隊員や総領事との出会いを通じて、世界の幸せとは「人と人がつながり、支え合うこと」から生まれるのだと実感しました。

小学校での交流では、子どもたちが笑顔でダンスを披露してくれ、一緒に遊ぶ時間を過ごしました。言葉は通じなくても、笑顔を身振り手振りで心が通じ合う体験は、国境を越えて人がつながれることを教えてくれました。また、学校で行われている環境への取り組みについて紹介してもらい、現地の子どもたちが日常の中で環境を大切にしている施設に感心しました。

高校では、同世代の生徒たちと環境問題について議論し、実際にコンポストづくりも体験しました。意見交換を通じて、自分とは違う考え方や課題に気づくことができました。また、体育や部活動についてインタビューをした際、多くの生徒がスポーツにあまり関心を持っていないと知りました。私にとってスポーツは仲間とつながる大切なものなので、その違いを知ったことは大きな驚きでした。さらに、「私が当たり前に感じていたスポーツの楽しさは、必ずしもみんなと共有されていない」と気づき、人とつながることで自分の視野が広がったと実感しました。

大学では、文化交流やお祈り体験などを通じ、日本の学生達は宗教的な儀式を行うことはほとんどありませんが、インドネシアでは多くの学生が当たり前のようにお祈りをしており、宗教や文化に対する意識の高さを強く感じました。また、互いに日本の文化としてけん玉や折り紙を一緒に楽しんだり、現地の伝統としてチャナン作りを教えてもらったりしました。遊びや体験を通じて笑い合う時間は、文化の違いを超えて心が通じる瞬間であり、人とつながることの温かさを実感しました。

現地では、コンポストや太陽光パネル、水力発電といった再生可能エネルギーの取り組みを視察しました。人々の暮らしの中に県境を守る工夫が息づいており、持続可能な未来のために小さな努力を重ねる施設に心を打たれました。また、総領事との議論では、インドネシアにおけるスポーツ環境の整備状況について質問し、日本とは異なる課題があることを知りました。さらに、海外協力隊の日本語教師の方からは、苦労の中にもやりがいを見いだし、人々と信頼関係を築きながら活動している姿を伺い、真の国際協力とは「人と人がつながること」であると強く感じました。

私は将来、ＪＩＣＡ海外協力隊のスポーツ隊員として活動することを目指しています。スポーツは、言葉や文化の違いを超えて人をつなぐ力をもっています。今回の研修で、スポーツへの関心が薄い地域もあることを知り、楽しさを共有することの難しさに気づきました。

しかし同時に、それこそが私にできる挑戦だと感じました。スポーツを通して仲間と笑い合い、支え合う経験を届けることができれば、人々の心に小さな幸せを生み出せると信じています。

インドネシアでの経験を通して、世界の幸せは特別なことではなく、人と人がつながり、互いを理解し合う中で生まれるものだと実感しました。環境への取り組みや文化、スポーツへの考え方など、違いに触れるたびに自分の視野が広がりました。私はこれからも人とのつながりを大切にし、スポーツを通じてその輪を広げていきたいです。そして将来は、海外協力隊の一員として現地の人々とともに活動し、共に成長しながら幸せを形にしていきたいと考えています。一人ひとりの小さな行動や交流が、やがて大きな幸せへとつながると信じています。